

施設園 の一 養護 関 児童 藤

防災 エコ 地域交流拠点

多機能盛り込み再建

一関市山目の児童養護施設一関藤の園(マウエル・クリスタ園長)は、老朽化が進み東日本大震災でも被災した同施設を再建する。新施設は電力自給設備や緊急時に避難所となる交流スペースを備え、防災拠点などとして地域に開かれた設計。子供たちの生活環境も改善する予定で、「復興後の公共施設のモデル」(マウエル園長)として2012年11月の完成を目指す。

総費用各国からの寄付で

新施設は鉄筋コンクリー積は約3542平方メートル4階建て、延べ床面で、現施設の東側から真



再建後の一関藤の園の外観模型。天井部分に見えるのは電力自給を実現する太陽光発電パネル

上にかけて建築予定。一般の建物の1.3倍程度の耐震強度を持ち、約7億円の総費用は世界各国からの寄付で賄う。12年1月に現施設を取り壊し、2月に着工する計画。建設中、子供たちはグラウンドに建てられる仮設生活棟で暮らす。

最大の特徴は、屋上と南側の壁に設置する太陽光発電パネル。表面積は計約520平方メートル、熱と光の2方式。一関高専の星朝機械工学科教授が手掛けたもみ殻やまきを燃料とする発電・発熱装置との併用で、施設内の電力のほとんどを自家供給する。

交流スペースは非常時に180人を収容できる避難所として転用可能。地下には貯水量200トンの雨水タンクも備え、震災を教訓に自給自足能力を高め、地域に根差した施設を目指す。子供たちの生活棟は共用のリビングとまきストープが備えられたユニットごとに分けられる。中学生は個室での暮らしが実現する。

同施設は震災後、ライフラインや通信設備の途絶に加え、余震のため一時体育館での生活を余儀なくされた。築32年と老朽化も進み、長らく再建が検討されてきた。

きっかけとなったのは、マウエル園長の母国・ドイツをはじめとする世界各国からの支援だった。震災当初、在日ドイツ人としてマウエルさんが多数の海外メディアの取材に応じ、同施設の被災状況はドイツ語圏から世界に広まった。

以来、国際NGOや企業から個人まで次々と寄付や支援の申し出があった。国内からもドイツ系「プロジェクト」がスタート。国際援助団体のマルティン・ザ・インターナショナルとカリタスが海外との仲介役を務める。マウエル園長は「来年は開所50周年の年でもある。自活型施設の完成をゴールに、子供たちの暮らしの改善も図りたい」と話している。

現在と同園を本部とする再建計画「一関藤の園プロジェクト」がスタート。企業を中心に支援があり、「単なる再建ではなく、防災、エコ、地域密着といったコンセプトに理解が集まっている」(渡部俊幸副園長)という。

現在と同園を本部とする再建計画「一関藤の園プロジェクト」がスタート。企業を中心に支援があり、「単なる再建ではなく、防災、エコ、地域密着といったコンセプトに理解が集まっている」(渡部俊幸副園長)という。

現在と同園を本部とする再建計画「一関藤の園プロジェクト」がスタート。企業を中心に支援があり、「単なる再建ではなく、防災、エコ、地域密着といったコンセプトに理解が集まっている」(渡部俊幸副園長)という。